

所 信

【はじめに】

本日ここに、西尾市議会 7 月臨時会が開催されるにあたり、今後の市政の舵取りに対する私の所信の一端を申し述べ、議員各位をはじめ、市民の皆様のご理解とご協力を賜りたいと存じます。

近年、世界各地で「分断」が社会における深刻な危機として認識されていますが、その危機がいよいよ国内にも及んでいると感じます。物事は多面的であり、視点が異なれば見え方も異なるのが通常です。しかし、一面的な見え方に絶対的な価値を置いてしまうと、それとは相容れない価値観や考え方を認めることができなくなってしまうます。相手を徹底的に攻撃したり排除する言動は、そこにある種の爽快感を抱く人もいるのかもしれませんが、それによって物事が良くなるわけでは決してありません。

哲学用語の中に、「アウフヘーベン」という言葉があります。弁証法における基本的な考え方の一つで、日本語では「止揚」と訳されます。意識すれば、対立する考え方があってもそれを否定せず、議論を深める中でそれらを掛け合わせて統合し、より次元の高い答えを導き出すことをいいます。二項対立的な考え方によって「分断」が進む市政ではなく、アウフ

ヘーベンによって前進する市政を目指します。

【夢や希望の持てるワクワクする西尾市の実現】

バブル経済崩壊後の日本経済について、「失われた30年」と評されることが多くあります。国際的に見て低成長の時代が長く続いたことは、各種の経済的な指標として表れているだけでなく、社会に漂う閉塞感に繋がっていると思われます。

今ある現実を受け止め、それと折り合いをつけながら生活していく姿勢も確かに必要です。「夢」や「希望」という言葉を口にすること自体がはばかれる時代なのかもしれません。しかし、夢や希望は人生を切り拓いていく原動力であり、社会がより良くなっていくための原動力であるため、その大切さを正面から訴えていきたいと考えています。

そして、自然に夢や希望を持つことができる社会であるためには、閉塞感を打ち破るワクワク感が必要であり、市政を担っていくにあたっての最重要キーワードとして、引き続き「ワクワク感」を掲げます。

【なせば成る なさねば成らぬ 何事も】

「三重の縁」と呼ばれる強い絆で吉良家と結ばれていた上杉家。その第9代当主である上杉鷹山公が、家臣に対して示したとされる心得として

有名な言葉が次の一節です。「なせば成る なさねば成らぬ 何事も 成らぬは人の なさぬなりけり」。現代語訳すれば、「どんなことでも、強い意志を持って挑戦すれば必ず実現できる。無理だと諦めて挑戦をしなければ、実現できない」。

日本は、チャレンジしにくい社会であると言われます。「出る杭は打たれる」という言葉に代表されるように、同質性が求められる文化であること、他の国々に比べて国民の自己肯定感や自己効力感が低いことなど、原因は色々考えられますが、現状を良しとしてはいけません。

個人の人生におけるチャレンジの意義としては、自分自身の成長、価値観や視野の広がり、新たな人との出会いなどがあります。そして、「やらぬ後悔よりやる後悔」という諺があるように、仮に期待したような結果が得られなかったとしても、一歩踏み出してチャレンジした方がより豊かな人生に繋がると考えます。「なせば成る なさねば成らぬ 何事も」の精神が根付き、「西尾にいとチャレンジがしやすい」、「西尾に行けばやりたいことが形にできる」、そんな声が飛び交うまちになれるよう、市民の皆さんや、市の抱える地域課題の解決に関心を持つ企業・団体のチャレンジを応援する仕組みを整えてまいります。

また、「なせば成る なさねば成らぬ 何事も」の精神は、市政を担っていく上でも必要なものであり、「できない理由」を探すのではなく、「で

きる方法」を考える姿勢とも相通じるものです。変化が速く不確実性の高い昨今のような社会状況においては、経験則やこれまでの常識が通用しないことが多々あります。そのような中でも成果を出していくためには、積極果敢なチャレンジが欠かせません。「できない理由」を探して現状に甘んじることなく、「市民のために」という強い意志を持ち、様々な事業に前向きにチャレンジしていける組織を目指します。

【居場所づくり】

夢や希望の持てるワクワクする西尾市を実現していく上で必要なこととして、『動』に当たるのがチャレンジの推進とすれば、土台として機能し、『静』に当たるのが居場所づくりです。自分の居場所を見出せないような状況では、夢や希望を持つことは困難だからです。

単身世帯の増加やインターネットの普及などに加え、プライベートな事情に干渉しない考え方が一般化してきていることもあり、家族、地域、職場などにおける人と人との繋がりが希薄化しています。孤独・孤立を感じる人が一定数いることは、国の調査でも明らかになっており、心身に有害な影響を与えるリスクがあることから社会的な課題として認識され、令和6年4月1日には孤独・孤立対策推進法が施行されています。近年の状況を一言で言うなら、SNSをはじめとするネット環境でのコミュニ

ケーションよりも濃く、だからと言って「しがらみ」と感じない範囲での自分の居場所を求めている人が多いということではないでしょうか。昭和の時代とは異なる形で繋がりを再構築し、今の時代に合った居場所づくりを進めてまいります。

【市政運営から市政経営へ】

明治維新以降、地方は国の出先機関のような機能を長らくの間担ってきました。日本国憲法の制定によって地方自治が保障され、1990年代には地方分権推進法が制定され、時代の流れとともに地方自治も進化を遂げてきました。

これからの時代は、人口減少の速度に拍車がかかり、高齢化もさらに進むことで、社会全体の労働力が減少し、国内のマーケットも縮んでいきます。また、生き方や価値観の多様化に伴い、行政需要はますます高まっていくと予想されます。財政状況が厳しさを増すことが見込まれる中でも質の高い市民サービスを維持していくためには、地方自治はさらに進化していかなければなりません。

地方自治体が社会全体の利益を追求するのに対し、民間企業は一義的に利潤を追求するため、存在意義や求められる役割は異なります。企業の世界では当たり前の経営感覚は、行政の世界では無縁のものと思われて

いる節もあるように感じます。しかし、厳しい競争環境に打ち勝っていくためにも、民間企業とは同じレベルではないとしても、経営感覚を活かした「行政経営」を力強く進めていくことが必要だと考えます。「市民本位」、「コスト意識」、「成果」をキーワードに、組織として経営を意識して行動するための仕組みを整え、組織力の向上を図ります。

【ダウンサイジングと合意形成】

西尾市が抱える最大の課題の一つである公共施設の再配置。それを目的とした西尾市方式PFI事業については、様々な問題を内包していたことから契約解除に至り、現在は終局的解決に向けて提起された訴訟の場において審理が進められています。契約前から続いた一連の混乱を通じての一番の教訓は、市民との丁寧な合意形成の必要性であり、これを今後の再配置に活かしていかなければなりません。

そして、ハード事業に限らず、ソフト事業も含めた市政全般について、「なんでもやります」と風呂敷を広げてもある程度通用した時代から、広げた風呂敷をどう畳んでいくのかという時代に移り変わってきていますが、頭では分かっている、自分自身が利害関係者になると簡単に納得できないのが人情でもあります。合意形成における特効薬はないことを肝に銘じ、様々な声を真摯に受け止めながらダウンサイジングの必要性を

丁寧の説明し、個々の事業において合意形成を進めてまいります。

【教育は国家百年の大計】

地方創生の号令がかかって10年が経過しました。このムーブメントは、人口減少への強い危機感から始まったもので、この間、人口減少を食い止めるため、あるいは人口を増加させるために、全国の地方自治体は知恵を絞り、試行錯誤を続けてきました。地方創生の本質は、各地域がそれぞれの特徴を活かして、自律的、持続的な社会をつくることにあります。横並び意識から脱却するという意味では一定の意義があったと考えますが、次第に人口の奪い合いの様相を呈し、「子育てしやすいまち」を標榜する中で、多額の財政出動によって人口流入を促そうという傾向が強まっていったと感じています。

子どもたちは社会の宝であり、教育や子育てに係る経済的な負担を軽減していくことは社会的な要請でもあります。西尾市も方向性を同じくして、これまで様々な取り組みを実施してきました。しかし、経済的な負担の軽減ばかりに関心を寄せるのではなく、子どもたちにこれからの時代を生き抜いていく力を身に付けてもらうために、教育はどうあるべきかということについても、もっと考えるべきではないでしょうか。

教育は国家百年の大計です。地域や国がこれからも発展し、世界に冠た

る日本を築いていくためには、人材への投資が欠かせません。西尾高校の中高一貫教育の導入を間近に控え、市内での教育熱が高まる中、考え方や目指す姿等を教育委員会と共有しながら、主体性をはじめとする非認知能力の育成にも力を入れ、質の高い教育を推進します。

【真の地方創生に向けて】

市内外の方々から高い評価をいただいている事業の一つが、中心市街地活性化の取り組みです。中心市街地は、ビジネスや生活に関わる様々な機能が集積し、「まちの顔」としての役割を持つエリアですが、全国的に地方都市における中心市街地の空洞化が進み、数年前までは西尾市でも例外ではありませんでした。

市の中心市街地の中核をなす商店街は、玄関口である名鉄西尾駅から少し離れており、西尾駅の乗降客数自体も他の主要なターミナル駅と比較して多いとはいえないため、このような場所にある中心市街地の活性化は、正直容易ではありません。それにも関わらず、市の補助金を活用した件数だけを数えても、直近３年間で１３もの店舗が新たにオープンし、今年度もこれまでを上回る出店希望の問合せをいただくことができているのはなぜか、そこに真の地方創生の鍵があります。

決して奇をてらうようなことをしたわけではありません。目的を明確

にする。目的達成に向けての目標を設定する。目標を達成するための手段を決め実行する。こうした一つひとつのプロセスにおいて、担当の職員が幅広く情報を収集して緻密かつ徹底的に考えるとともに、現場に何度も足を運んで同志となる民間プレイヤーとの信頼関係を構築しながら、強い意志と情熱を持って行動することができたからだと考えています。言ってみれば、凡事徹底の結果です。

西尾市は、製造業の集積、多種多様な農業の営み、豊富な観光資源など、地方創生を進めていく上で多くの強みを持っています。凡事徹底によりそれらの強みを活かした魅力を磨き上げ、真の地方創生を推進してまいります。

【おわりに】

以上、市政経営に対し、私が重きを置く考え方について述べさせていただきました。所信表明の中で申し上げられなかった具体的な施策については、今後の施政方針や予算などでお示しさせていただきたいと存じます。

議員各位をはじめ、市民の皆様におかれましては、格別のご理解とご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます、所信表明とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。